

新しい夏の過ごし方

ながれ

柴山 徳一郎 (しばやま とくいちろう／群馬県高崎市在住)

今年は年明け早々新型コロナウイルス感染拡大により社会が一変してしまった。毎日報じられる感染状況に、いつ身近に発生するのか、いつ自分が感染するのか戦々恐々とし、職場も毎日変化する状況に神経をとがらせて対応しなければならず、家庭でも感染のリスクを減らすため閉じこもり、ストレスはマックスのまま半年が過ぎた。

現在、日々報じられる感染情報に慣れてきたのか、それともストレスで麻痺してきたのか、平然と受け流している自分に今までとは違うストレスを感じている。自然の驚異に対し、あまりにも無力な自分を再認識しているのかもしれない。また、九州をはじめとした豪雨の被害をみても、ダブルでその無力さを痛感させられてもいる。

今まで環境問題を考えてきたが、その根底には「人間が自然を破壊し温暖化をはじめ様々な環境問題を引き起こしたのだから人間が責任を持って対応すべきだ」と考えていた。しかし、新型コロナウイルスが発生した原因も新たな環境問題とすれば、あまりにも重い責任を取らされている状況にいら立ちさえ感じている。しかもその被害をまともに受けるのはいつも弱い立場の人たちであり、環境問題を引き起こして利益を得ている人々では決してない。

梅雨明けし、これから本格的な夏が到来する。しかも猛暑ではなく酷暑。プールや海水浴も今年はコロナ禍でなくなり、夏休みは大人も子供も1週間。旅行も帰省もほとんどなくなり、家から出なくなり、皆ネット社会に没頭していく。ネット社会が

なかったら皆何をするのだろうか？掃除・読書・勉強・家でできる趣味と色々あるし、またそうしている人も多いと思う。ITの技術がなければテレワークもオンラインもできず、日本経済は今以上に相当なダメージを受けていたかもしれない。

AIが発達し、ITの進歩がすべてビジネスのために使われている気がしてならない。現在の環境問題をAIに解決策を求めたらどうなるだろうか？温暖化をスーパーコンピュータでシュミレーションした映像を今でも強烈に記憶している。地球上、いたるところで寒暖の差が一層激しくなり豪雨と干ばつの場所がはっきりと分かれ、人が果たして住めるのか心配になった。現在起きている異常気象に、人類がどう責任を持って対応しなければならないのか、グレタさんが各国1人いても足りないかもしれない。

新しい生活様式が求められているこの夏、コロナ対応だけでなく、環境問題も考えた生活様式を考えてみるべきなのかもしれない。7月1日からレジ袋有料化が始まり、テレワークでCO₂の排出も減ってきている。観光も自然環境が許容できる人数に押さえることもできる。温暖化問題の前に立ちだかっていた経済優先主義は、皮肉にもコロナ禍で見直しを求められている。

人類はこのコロナ禍をワクチン・特効薬の開発で必ず乗り切るだろう。しかし、その先にはやはり環境問題にまじめに取り組む生活様式ができていなければ先はないと思う。今年の夏はそれを考えてみる新しい夏である。